

今月のハイライト

■ リハビリテーション工学に今求められているもの

リハビリテーション医学は主として運動器系の障害を対象としているが、その医療分野と関連するリハビリテーション工学の領域は多岐にわたっている。リハビリテーション工学は機能障害に関するものよりも、能力低下や社会的不利に関連するものに重点が置かれており、脊髄損傷者に対しては生活の自立度と QOL を高めることが目的となる。そのためには、障害者のニーズが何であるかを知り、機器の標準化やモジュール化のためのシステム作りが大切である（永田雅章氏，477 頁）。

■ 脊損者の自立にとって必要にして十分な車いすクッションとは？

市販されている種々の“車いすのクッション”の座圧を測定し、坐骨部の圧力、使用時の安定性、耐久性、快適さ、さらに価格の妥当性などを論じている（井上虎吉氏，483 頁）。

■ 運転シミュレーションをとうしてみた自動車改造のチェックポイント

脊損者のための自動車改造の最重点チェックポイントはハンドルの操作性である。C₇レベルが機能していれば大きな改造を必要としないが、C₆レベルに麻痺があるような場合には“安全に対する国家規模による新たな研究機関”が必要（土嶋政宏氏，487 頁）。

■ 環境制御装置の利用価値を高めるために

環境制御装置の利用価値をさらに高めるのに必要なことは、第一には公的給付制度の確立、第二にユーザーに対してのメンテナンス体制の整備である（畠山卓朗氏，493 頁）。

■ 残存機能を十分に活用した日常生活のために

出入り口、寝室、トイレ、浴室などの具体的な改造方法の最近例を示して、C₆不全麻痺レベルの脊損者の自立の可能性を追求。住宅は日常生活機器、介助機器等を総合的に考慮した設計を（松尾清美氏，497 頁）。

■ 工具としての利用から、新しい概念でロボットを利用する時代へ

介護ロボットは、脊損者のみならず、わが国の高齢化社会の前途に対して大きな助け船となりそうな研究課題。マニピュレータの実用化が進んでいる国外の研究事情と合わせて解説（斎藤之男氏，503 頁）。

■ 嚥下障害のリハビリテーションの新しい方法

バルーンカテーテルによる間歇的空気拡張法とは、咽頭相の嚥下障害患者に対してバルーンカテーテルを用いて積極的に輪状咽頭筋を拡張するもの。リハビリテーション専門医にも十分施行可能な新しい治療法（角谷直彦氏ら，513 頁）。

■ コンピュータの進歩は目ざましいが……

コンピュータは進歩した。しかし“情報は利用者の中にある”と理解する概念がないと何にもならない”とは至言（才藤栄一氏，473 頁）。